フィラーを使用することと不安の高さの関連について

岡　田　恵　奈

臨床心理学研究　東京国際大学大学院臨床心理学研究科　第 18 号　抜刷
2020 年（令和 2 年）3 月 31 日

フィラーを使用することと不安の高さの関連について

岡　田　恵　奈

目　次

第Ⅰ章　問題
1. フィラーとは
2. フィラーの種類
3. 心理学研究から見たフィラー
4. 言語連想検査
第Ⅱ章　目的
第Ⅲ章　予備調査
1. 対象者
2. 実施日時
3. 調査内容
4. 予備調査の結果と考察
第Ⅳ章　方法
1. 対象者
2. 実施日時
3. 調査内容
4. 手続き
第Ⅴ章　結果
1. 有効回答数と分析対象者
2. 尺度の記述統計量と信頼性
3. フィラーの使用頻度とA-TraitおよびA-Stateの関係
4. フィラーを使用するタイミングについて
5. フィラーを使用する意図について
6. 性差について
第Ⅳ章　考察
1. フィラーの使用頻度について
2. フィラーを使用するタイミングについて
3. フィラーを使用する意図について
4. STAI日本語版について
5. 仮説の検証
6. 性差について
7. 総合考察

第Ⅰ章　問　題

1. フィラーとは

石川（2010）によると，「フィラー」という術語が一般的になったのは1990年代以降のことであり，1980年代までは「言いよどみ」と呼ばれることが多く，ほかにも，遊び言葉，場つなぎ言葉など，様々に呼ばれていた。会話の中で沈黙することや，いわゆる「どもり」も言いよどみと呼ぶことがあり，言いよどみは「えーと」「まー」「んー」といった言葉を指すフィラーよりも定義の範囲が広い。

フィラーは，元々はBrown Gregの用語で，発語権維持のために間をつなぐための言葉であるとされているが（定延・田窪，1995），定義が統一されているとは言えず，大まかな部分は同様であるものの細かいところは研究者によって違いがある。フィラーは最近の言語学の辞典にも見出し語として載せられていないほど聞き慣れないものであるが，それはフィラーと呼ばれているものの位置付けが難しく，日本語においても英語においてもさまざまな名称で呼ばれてきたからである（山根, 2002）。英語の“filler”には本来，①満たす人［物］，注入器；②a（補

＊臨床心理学研究科 博士課程（前期）

強用または嵩を増すための）詰め物，充填物，混ぜ物，b 代用品，c（新聞・雑誌などの）埋め草記事［写真］，（放送番組の間の）時間つなぎの音楽放送［スポットアナウンスなど］；③（ルーズリーフ用の）ばら紙;④飼木《2つの材・梁などの間にはめ込んで位置を調整したり支えたりする木片》，（靴の）靴型，中物芯；⑤（葉巻・紙巻きタバコの）中身，中に詰める葉；⑥小型のラジオ［テレビ］用送信機《受信不可能地域をカバーする》；⑦充当詞《Pikeの文法要素論（tagmemics）の用語》，フィラー充当［補充］語，つなぎ語《口ごもったり間をとったりするときに入れる語》；⑧（ワニスを塗る前に表面のすき間を埋める）詰め物，目止め;⑨（食べ物の量を増やす）安いまぜ物，増量材といった意味がある（小西・南出，2001）。このように「繋ぐ・埋める」といった意味合いが強いことから，フィラーを会話と会話の目張りといった意味で捉えられることが分かる。

松原（1996）は「言いよどみ（ポーズ，フィラー）」について，適当な表現が見つかるまで，あるいは発語内容をまとめたりする時間を稼ぐ機能を持ち，時にその機能を持たず，相手の注意をひきつけたり，ためらう気持ちを表したり，リズムを取ったりするために文頭または文中で用いられ，実質的意味を持たないものと定義づけている。また，田窪・金水（1997）は，もともと意味を持っていた「あの」「なんか」「やっぱり」が感動詞として使用されると具体的指示機能を失い，「探している」「だいたいこんな感じ」「自分の気持ちと合っている」といった「ある種の心的操作，心的状態」に対応する形式になってしまっており，これらの語彙の用法を研究することは，現代人の言語心理を浮き彫りにするという点でたいへんおもしろい課題であると述べている。

フィラーについていくつかの役割に分類して定義づけた研究者もいる。Maynardはフィラーを，命題的意味を持たない発話として捉え，言語表出に関わるフィラーと，対人関係のために用いられるフィラーの2種類に分類している（福原，2009）。それらの機能について，（ⅰ）沈黙を回避する，（ⅱ）話の継続を示唆する，（ⅲ）躊躇や不確かさを表明する，（ⅳ）発話を和らげる，などの働きがあり，（ⅲ）（ⅳ）はいわゆる対人調節的なものであるとMaynardは指摘している（福原，2009）。田中（1981）は，言いよどみ現象自体を分類し，「①反復，②言い直し，③有声休止，④無声休止，⑤その他（a：強調，b：介入音，c：他の話と区別されるささやき，d：気が付き，e：長い沈黙，f：文内遅速，g：添音）の5種類に分類したが，言語連想検査においての『反応時間が長くなること』は，④無声休止あるいは⑤その他（e：長い沈黙）に当てはめられるのではないだろうか」と述べている。また，今回焦点を当てている「えーと」「なんか」などのフィラーは，「③有声休止に当てはまる」と述べている（田中，1981）。さらに，山根（2002）はフィラーを「それ自身命題内容を持たず，かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にない，発話の一部分を埋める音声現象」と定義づけ，さらに詳細に概念化させてフィラーの果たす役割を以下の5点にまとめている。

①発話権保持のためのフィラー：これについて山根（2002）は，「話し手が情報を小出しにしていく際，聞き手が打つ相づちの後に現れるフィラー」であると説明している。さらに，「聞いていることを示す聞き手からの相づちは，話し手の発話を促進する効果をもたらすが，しばし話し手の発話を中断させることにもなる。そのため，話し手は発話の立て直しを図り，引き続いて発話権を保持していくことを示すためにフィラーを使用するのである。ここに位置するフィラーは，聞き手にとっても有益である。話し手が交替した場合，しばしば発話の重なりが起こり，発話の冒頭を聞きそこなう恐れがある。小出しにされる情報の冒頭に現れるフィラーは，相づちと次の情報の重なりを防ぎ，聞き手が情報を聞きそこなうリスクを減らすことにつながるからである」（山根, 2002）と説明し，代表例に「あの（ー）」を挙げている。

②新しい情報を切り出す際の注意喚起の役割を果たすフィラー：これは「相手の発話に相づちを打った後，新しい情報を切り出す際に用いられるフィラーがそれである。『あの(ー)』『ま(ー)』に代表されるこれらのフィラーは，また発話境界の指標にもなる」(山根，2002)。

③適切な応答を考えつくまでの時間稼ぎの役割を担っているフィラー：これは「質問や確認の発話に対する応答の冒頭に現れる」(山根，2002)。

④結果的に発話権譲渡の手助けをしてしまうフィラー：これは「話し手がフィラーで次の内容を模索している間に，聞き手が発話を行ってしまう場合である。そこで話者交替が起こり，フィラーが発話権譲渡に貢献することになるのである。この場合，相手のフィラーをきっかけに強引に発話権を奪うこともあるだろうが，話し手の発話をフォローするに止まる場合も多い」(山根，2002）という。

⑤話し手の心的態度を表明するためのフィラー：これは「たとえば，質問に対するためらいの気持ちを表すものである。自分の過去や家族についてを語る，その内容に多少のためらいを持つためにフィラーが出現する。『あの(ー)』や『ま（ー)』が典型的なものである」(山根，2002）と述べられている。

山根（2002）は上記のフィラーの役割5点に加え，話し手の発話から言及できるフィラーの役割を7点挙げている。「位置として助詞の後が好まれる」間つなぎ，「適切な言語形式を探したり次の言葉を思い出せなかったりして次の発話までにさらなる時間を要する場合は5拍以上相当のフィラーやフィラーの連続」が使用される時間稼ぎ，「談話や発話の冒頭に現れ，話し手がある話題を導入する際に用いられ（中略)，発話の途中で話題を転換することによってなされることもある」話題の切り出し，「発話において特殊な要素が出現する位置を示す指標」となる倒置発話・挿入発話示唆，「言いさした後，別の語に変える場合や同じ語を繰り返す場合」に生じる換言・修正，「話し手が話したいことの存在をあらかじめ聞き手に臭わせておく」話題の予告提示，「『こー』『もー』『うん』」などの「話し手が『このように』体験してきた，その体験を利き手と共有したい気持ちの表れ」である話し手の心的態度表出の7つである（山根，2002)。

このように研究者によって多少のずれや表現の相違はあるが，ほとんどの人のフィラーの共通解釈としては「会話の指標」が挙げられる。また，フィラー自体に文法的な意味は発生しないかもしれないが，話し手の意図や感情など，あらゆる要素がフィラーとして表現されており，対人調節的なものであると言える。フィラーを多用することは，会話の内容を考えているということも一因として考えられるが，対人調節がそれほど必要であるためだとも考えることができる。また，会話の中で沈黙を作らないようにするため，あるいは適切な言葉を選ぶことに時間をかけるためにフィラーを用いることは，他者との時間的距離を埋める行為であり，他者を気にしているからこそ生まれる表現であると考えられる。「発話をしなければならない」という使命感が強ければ強いほど，会話と会話の間を埋めなければいけないというような感覚が生じるために，フィラーを発する場合もあるのではないかと考える。また，松浦（1996）は「今までで1番怖かった事」を30分話してもらう中で現れたフィラーについて，種類と頻度の統計を行っている。その研究結果によると，「特に30代の男性はフィラーを種類豊富に用いているのに対し，女性は，『あの(ー)』と『えーと』の2種類，30代の女性に限っては『あの(ー)』1種を半数以上というように偏った用い方をしていることが分かる。また，『この』『その』が男性によく使われている。次に，年代別に注目すると，20代に比べ，30代の方が『あの（ー)』を用いる頻度が高いようである。これは『あの(ー)』1種を主に用いる30代の女性に限らず，最もフィラーを種類豊富に使い分けている30代男性さえも約半数用いていることが分かる。さらに，各フィラーに注目すると，意外にも

『えーと』の頻度が低いことは分かる。中には全く用いなかった話者も30代男女に各1名ずついた。その他，『そうですね』は他のグループに比べ，30代女性によく用いられている」。

このことから，フィラーは性別や年代によって使用する種類が異なることがわかる。フィラーの種類によって会話への影響が異なる場合，性別や年代によってフィラーの扱いや意識が異なることも考えられる。

2. フィラーの種類について

山根（2002）は，先行研究についても，場面ごとのフィラーについても，詳細に調べている。山根（2002）は講演の談話におけるフィラー，留守番電話の談話におけるフィラー，対話におけるフィラー，電話の談話におけるフィラーというように，場面ごとに使用されるフィラーに分類を行い，談話の種類ごとに頻出するフィラーをまとめた。本研究では対人場面的日常会話におけるフィラーを想定しているため，山根（2002）の「対話におけるフィラー」を参考にする。

山根（2002）の対話におけるフィラーについては，テレビのトーク番組やインタビュー番組を会話のデータとして用いている。フィラーが49種類，全出現数が1,394例であったうち，①コソア型，②マー型，③母音型，④モー型，⑤コーソー型，⑥ナンカ型に大別できることが分かった。また，他の先行研究でよく見られる「えーと」や「ん（ー）」は「対話におけるフィラー」の中では特に分類されていなかったため，以上の6種類に加え，⑦その他として分類を行うこととする。

A. コソア型

コソア型とは，「人や物，直前の発話で述べられたことを支持する以外に用いられる『この（ー）』『その（ー）』『あの（ー）』」であり，「『あのね』など助詞が付加されたものも含む」（山根，2002）。定延・田窪（1995）によると，「あの（ー）」の基本的作用は，「話し手が言語編集という，聞き手の存在を予定する心的操作をおこなっている際に用いられる。この心的操作は具体的には，名前の検索と，適切な表現の検討に二分される。（中略）名前の検索とは簡単に言うと，モノ自体はわかっているが，モノの名前が思い出せないと言う場合の心的操作である。具体的には，話し手の意識を心的バッファから，そのものに関する情報が格納されているデータベース内の該当箇所に戻し，そこで属性のひとつである名前を検索すると言う操作である。（中略）他方，適切な表現の検討は，言いたいこと（これはすでに漠然とせよ定まっている）に適した言い方に心的バッファで編集するという操作」である。「あの（ー）」について，松浦（1996）は，「20代に比べ，30代の方が『あの（ー）』を用いる頻度が高い」と述べている。松浦（1996）は「あの（ー）」について，「時間稼ぎの機能として多く文中において，話す事柄が想起された後の，発話内容の整理や適切な表現選択の際に用いられる。話者交替後の文頭において用いられた場合には，時間稼ぎの機能だけでなく，相手の注意を引きつける機能を持つこともある。話者交替が行われず，現在の事柄について述べたり，自分の意見が述べられたりする場合には，『あの（ー）』が好まれる」と述べている。

山根（2002）の「対話におけるフィラー」研究において「この（ー）」「その（ー）」が出現する数は非常に低く，「あの」系がコソア型の8割を占めていたという。小出（2006）はコソア型について詳細に説明している。「この（ー）」の機能は「発話時に心的に思い浮かべられている内容があるが，その表現形式が確定しておらず，実時間的に形成されつつあるものであることを示す。これは同時に，聞き手には表現形式が模索中であるというマークにもなる」（小出，2006）と説明している。また，「その（ー）」は「後続する発話内容が，話し手にとって非関与的（話し手に関わりがない，あるいは，聞き手・話し手双方に関わりのない）領域のものであること，あるいは，話し手が独占的に関与す

るものとは主張できない，しないものであることを示す」（小出，2006）。小出（2006）は，さらに，コソア型の会話の中での機能と相互関係について述べており，「この（ー）」は「ひとまとまりの内容の開始部の表示」，「その（ー）」は「談話参加者と談話内容の領域との関係表示」，「あの（ー）」は「コミュニケーションの開始，談話ステップの移行，談話形成に関する対人的調整」と説明している。コソア型は「対人的な場面でのみ現れる。（中略）後続内容が参加者とどのような関係にあるかを表示することによって，そのような対人的配慮を表現する機能を果たしている」（小出，2009）と論じている。

B. マー型

山根（2002）によると，マー型とは，「『ま（ー）』『まーね』など，『ま』の長短，『マー』の後に助詞が付加されたもの。『まあ　きれい』のように感動や驚きを表す『まあ』は含めない」と定義されている。また，他のフィラーとは異なり，「まー」は「副詞としての用法」（富阪，2002）を持つ。また，富阪（2002）は「『まー』（富阪は「まあ」と表示）を用いた発話は聞き手に対して押し付けがましい印象を与えない。それを唯一のものとして主張するのではなく，そのような主張も可能性の一つとして存在するものとみなして提示するからである」と述べている。小出（2009）は，「ま（ー）」について注釈，例示，見解表示，発話ポイント，引用，談話の区切りに用法区分を行った。これらの内容が話されるときに「ま（ー）」が出現する。

C. 母音型

「あ（ー）」「え（ー）」などの母音によるフィラーである。なお，山根（2002）の「対話におけるフィラー」では，「『イ』で始まるフィラーはまったく出現しない」とのことである。小出（2009）によると，「え（ー）」は「新しい談話の開始，話題の開始（旧話題からの転換）」，「談話の新しい局面への移行」，「談話の中心プランに沿った発話であること」，「質問を受けた時など，内容や表現を調整するための心的スペースを作り出す」，「反応を遅延させ，時間的な距離（スペース）を作り出す」機能がある。

D. モー型

山根（2002）はモー型を「『もー』『もーね』など，『も』の長短，『もー』の後に助詞が付加されるもの。『もう5時だ』のように『既に』の意味を持つもの，『もう来るだろう』のように『じきに』の意味を持つもの，『もう一つどうぞ』のように『さらに』の意味を持つ『もう』は含めない」と述べている。小出（2009）は「もー」（小出は「もう」と表示）について基本的な意味を示した上でフィラーとしての用法を，「話題の事柄の成立を当然のことと見る姿勢と連動する用法」，「話題の事柄が特筆すべき経験であるとする姿勢と連動する用法」，「心情としての『もう』」の3つに分けた。小出（2009）はさらに，「もー」のフィラーとしての特徴として「内容についての姿勢の表現というようなことがあるのではないかと思われる。（中略）話し手の心的な昂揚が，文という容れ物からあふれ出て表出されたもの」と解釈している。小出（2017）によると，「もー」は発話冒頭には現れず，呼応する修飾先が特定できない特徴がある。

E. コーソー型

「『こー』『こーね』『そー』『そーね』など，『こ』『そ』の長短，『こー』『そー』の後に助詞が付加されたもの。『こう　友だちがいつも担いで』のように，話し手が動作などでその状態を示すときに使用される『こう』は含めない。また，応答の冒頭に来た『そーですね』は，相づちととらえ含めていない」（山根，2002）。山根（2002）においては「こー」はコーソー型としてまとめられているが，小出（2009）においては，コソア型の副詞形としている（小出は「こう」と表記）。同じく副詞形にした時に，「そー」（小出は「そう」と表記）や「あー」（小出は「あ

あ」と表記）に関して理由は定かではないが応答詞や相づちの印象が強いようで，フィラーではないと述べている。しかし，山根（2002）では「そー」はコーソー型として，「あー」は母音型として分類されている。小出（2009）は「こー」を「心的に思い浮かべられたイメージ（表現対象）について，そのイメージを心的に走査しながら，それを表現する形式の模索が行われていることを示す」と説明している。

F. ナンカ型

福原（2009）によると，「『なんか』は従来，代名詞・副詞として，発話の命題内容を構成する要素であったが，それがいわゆる若者特有の用法においては，主体の発想や発話態度を構成するもの」になっている。渡邊（1997）によれば，「『なんか』には連語の『なにか』という意味と助詞の『など』という意味」があり，一方，川上（1992）は「不定の注釈的表示と，その不定意識に基づく言語表現化志向」だと述べている。内田（2001）は，「なんか」の「前置き表現」について，①話題開始，②話題の発展，③話題内容の具体化，④次の部分へのつなぎ，⑤引用，⑥話題対象への評価の6つに分類した上で，ディスコマーカーとしての「なんか」には①「何かその後に新しく言いたいことがある」，②「話題になっている事柄のうち，それまでの話の流れからは予測できない事柄を際立たせる」側面があると述べている。田窪・金水（1997）は，「なんか」を「指示機能のない言いよどみの感動詞と分類し，『大体こんな感じ』という『心的状態』に対応する形式」になっていると述べるなど，「なんか」の文法的な解釈がなされている一方で，松浦（1996）は「20代では『なんか』が多く用いられており，特に20代女性は，用いるフィラーの約半数に『なんか』を用いている」と指摘している。このことから，「なんか」がフィラーとして用いられるようになったのは最近のことであり，特に女性が使用することが示唆されている。

G. その他

その他，山根（2002）の「対話におけるフィラー」の分類には当てはまらなかったフィラーには「えーと」「ん（ー）」などがある。「ん（ー）」は「『ん（ー）』『んーとね』『うーん』『うーんと』など，『ん』の長短および『うーん』と，それらの後に『と』や『と』と助詞が付加されたもの」（山根，2002）である。

松浦（1996）は「えーと」について，「時間稼ぎの機能として，多くの話者交替後の冒頭において，頭の整理を行い，話す事柄の想起の際に用いられる。話す事柄が想起された後にも関わらず，話者交替後に用いられた場合には，相手の注意を引きつける機能を持つ。話者交替後，数的情報が核心部分になっている場合，或いは未だ話すべき事柄が想起されていない場合には，『えーと』が好まれる」と述べている。小出（2009）は，「えーと」は応答する時，誤解に基づく質問などに対する対応する際，知悉していることがらについて聞かれた場合，質問の冒頭，話題の切り替えの5つの場合に表れると説明している。また，基本的には「心内に発話に必要な情報，あるいは，表現形式が形成されていないことに気づき，その空白を埋めるために，情報形成あるいは表現形式形成のための心的活動に入ろうとする状態」であり，「えーと」は「談話プランとのかかわりを表示」したり，「それまでの心内の作業内容をクリア」したりする機能があるということである（小出，2009）。また，高木・森田（2015）は「えーと」について質問後の応答開始部分に生じる点に注目し，「①質問が求めている特定的あるいは厳密な情報を『慎重に』提示する応答の開始部分，②質問にどのように応えているかがただちには明確でない応答の開始部分，③質問に示された質問者の推測に反する応答の開始部分」の3つの要素を見出した。さらに，高木・森田（2015）は「えーと」を「応答のターンの開始部分で用いることは，相互行為の進展が阻まれているように見える事態において，『今ここ』の状況についての間主観性を確立し，相互行為の前進を

約束するために利用可能な手続き」であると述べている。

上田（2005）は「いや（ー）」もフィラーとして取り扱っており，心的態度の表出のひとつとして機能し，「心情の高ぶり」を表すとしている。上田(2005)の調査によると，「いや(ー)」は50代に多く表れる。

さらに，定延（2010）は「フィラーというものは『絶望的』になり得る」と，フィラーとしての「さー」の「絶望性」に言及している。「後続する発言内容が相手の期待に沿わない」というフィラーの性質を「否定的性質」とすると，「フィラーの否定的性質が例外を持たないこと」を「絶望性」とする（定延，2010)。「『さー』の後に話し手が続ける発話内容は必ず，会話相手の期待に沿わないこと」（定信，2010）が続くため，「言いよどみ」というよりも「話題の否定」と受け取れる。これをフィラーとするにはやや疑問があるが，定信（2010）は「『さー』にかぎらず，会話においてフィラーを発するとは，そのフィラーと結びついている認知行動（中略）をあからさまにおこなうこと」であるとフィラーのあり方にも触れて述べている。

3. 心理学研究から見たフィラー

田中（1981）によると，「Freudが“言い間違い（speech slips)”を抑圧された欲求によるものと考えたように，言いよどみの心理的機制についても，不安などの情緒的要因を仮定するアプローチがあった。しかし，Maclay & OsgoodおよびGoldman-Eislerの古典的研究以来，言いよどみは発話を妨害する言語外的な（extralinguistic）事象ではなく，発話過程に内在する（intrinsic）現象であるとする認知論的アプローチが急速に台頭し始めた」と述べている。とはいえ，何らかの原因があって会話をスムーズに行えない，あるいは行わないということは，少なからず心理力動的な働きが生じているのではないかと考える。Freud（1917）は，失錯行為について言及する中で，「名前や計画の失認」も失錯行為であるとし，「二つの相異なる意向の干渉の結果生ずるもの」である心的現象だと述べている。失錯行為とは，「一つの意識的な意図がそれに対する無意識的な意図によって妨害され，抑圧される結果，一種の妥協形成が起こって生じるもの」（成田，2004）である。会話の中で名前や計画などの失認が生じた場合，多くの人がフィラーを使用するのではないかと考える。このことから，フィラーは表面的には場をつなぐための言葉であるが，その奥深くには何らかの心的な働きがあるのではないかと考える。

4. 言語連想検査について

河合（1967）は，Jungの行った言語連想検査について，「彼は簡単な言語の連想において，反応時間が相当遅くなる事実を認め，それは知的な問題というよりも，むしろ情緒的な要因によって起こると考え，これを臨床的に応用しようとして，言語連想実験の方法を確立したのである。（中略）簡単な連想過程において，多くの障害が生ずる点に注目して，Jungは連想実験によって無意識の心的過程の研究を行った。われわれの連想を妨害するもの，すなわち，意識の制御の及ばぬ心的過程の存在を認めざるをえないと考えたのである」と述べている。また，Jung（1905）は，「言語連想検査において，一般に刺激と反応の間に感情色調のある意識内容が入ると，反応時間は平均的に言ってそうでない場合よりもかなり伸びる」と指摘している。

以上から，簡単な単語の言語連想における反応時間の長さは，無意識的かつ情緒的な要因によることがわかった。日常会話は，話者が自身の経験や知識を背景に，相手との関係やその場の雰囲気，状況によって成り立つ。言語連想検査とは異なり，より複雑で様々な要因から生じるものではあるが，反応を遅らせるという行為において共通する部分があると考えられる。このことから，会話において発言を行う前の無意味な発語，つまりフィラーを多用することは，何らかの心的な抵抗の表れだと考える。その背景には不安の要素が含まれており，フィラーを使用することによって不安の解消を行っている

のではないかと考える。

第Ⅱ章　目　的

現在の言語学研究においてフィラーは，会話における談話指標のひとつとして研究が進められており，日常で誰もが使用する言葉である。しかしながら会話の中で発生する無意味な挿入語（フィラー）を多用することについての心理学的研究は少なく，日本ではほとんど行われていない。会話の中で「えーと」や「なんか」といったように言いよどむことは誰しもがある経験だと考えられる。しかしながら，このような現象が日本であまり研究されていないということは，少々不思議である。誰もが使用しているのにあまり研究されていないという部分に，“何気なく発せられている”というフィラーのあり方がそのまま表されているようにも感じられる。

フィラーがあっても会話に直接影響することは少なく，フィラーは発言者の感情がそのまま自己防衛的に表出された言葉として考えることもできる。フィラーを使用して沈黙を避けることによって相手との時間的距離を詰めたり，発言への抵抗感を示したり，あるいは他の心の動きがフィラーとして表現されている可能性も考えられる。相手との時間的距離を詰めることは対人不安的な背景が考えられ，発言への抵抗感は発言自体に嫌悪感がある場合や不安がある場合が考えられる。また，「発話をしなければならない」という使命感が強いほど，間を埋めるためにフィラーを発する可能性もあるのではないかと考える。このように，フィラーと不安には何らかの関係性があると考え，フィラーを理解し，フィラーをより多く使用することと不安の高さの関連を研究することにより，臨床場面への一助となることが本研究の目的である。

本研究でフィラーと不安の高さの関連を調べるにあたり，次のような3つの仮説を考える。

①フィラーには不安を一時的に下げる効果があり，フィラーを使用する人の方が，一時的に不安が下がる。

②フィラーには一時的に不安を下げる効果があり，フィラーをあまり使用しない人の方が一回の使用価値が高まるため，フィラーを使用している時には一時的に不安が下がりやすい。

③フィラーには不安を下げる効果があり，フィラーを使えば使うほど特性的な不安も一時的な不安も下がっていく。

また，フィラー研究はどれも古いものが多く，現代におけるフィラーの使われ方はどうであるかについても不明な点が多く見受けられる。本研究では上記の仮説を検証するだけではなく，現在におけるフィラーの使われ方や傾向についても検証を行う。さらに，今回はあくまでフィラーが使用される頻度と不安の関係を検討するため，フィラーの定義について言及は行わないものとする。

第Ⅲ章　予備調査

先行研究を調べた限り，フィラーに関して質問紙等で実証的なデータをとっていた研究は見当たらなかった。すなわち，フィラーについて質問するためには，本研究で用いる質問項目を作成する必要があることがわかった。そのため，会話における「フィラー（言いよどむこと）」についての質問を予備調査として行った。

1. 対象者

大学院生を対象に，12名に調査を行った。

2. 実施日時

2018年6月に行った。

3. 調査方法

大学院生に質問紙を手渡しして，予備調査への協力を求めた。質問紙の冒頭に「日常会話を行う中で，自分が発言を行う前に『ええと』『あのー』『なんか』など，会話には直接関係がない言葉を言うことがあるかと思います。これを

『フィラー』というのですが，これから，フィラーについての質問を行います。できるだけ思いつく限りお答えください。」と教示文を示した。その上で「1. 会話において，あなたが使用するフィラーの種類を教えてください。」「2. 1であげていただいたフィラーはどういう時に使用しますか。」「3. 1であげていただいたフィラーにはどういう意図や意味があると思いますか。」と質問を行い，自由記述形式によって回答を求めた。

4. 予備調査の結果と考察

A. 使用するフィラーの種類

使用するフィラーの種類は全部で51種類の回答が得られた。その中でも最も多かったフィラーの種類は「んー」であり，7名が回答をした。「んー」に次いで多かったフィラーは「なんか（6名）」「えー（5名）」「えーと（5名）」である。

今回の調査では，本来であれば謝罪の意味となる「すみません」がフィラーとして扱われていた。「すみません」は会話と直接関係のない言葉であるフィラーとしては考えにくく，調査協力者にとっての「フィラー」の意味が非常に広範囲であるように感じられた。中村（2007）は，フィラーは「場合によってはあいづちとの境界が曖昧」であると述べている。石川（2010）によると，相づちは「『相手の事情を考慮』して表出されるもの」であり，フィラーは「発話自身の都合によって表出する」。「フィラー」という概念が研究者間でも明確に区切られておらず，今なお曖昧さを携えている中，質問紙によるフィラーの種類を回答することは少々難しいものであることがわかった。

また，この予備調査は「日常会話を行う中で，自分が発言を行う前に『ええと』『あのー』『なんか』など，会話には直接関係がない言葉を言うことがあるかと思います。これを『フィラー』というのですが，これからフィラーについての質問を行います。できるだけ思いつく限りお答えください」とフィラーについて簡易な説明を行った後に「会話においてあなたが使用するフィラーの種類を教えてください」と質問を行った。予備調査の結果では「ええと」の種類が最も多く回答を得たことからも分かる通り，直前の説明で具体的な例示を行ったために多く回答された可能性が考えられる。この質問は，フィラーの種類によって不安の程度が変わるかどうかを知るための指標として質問項目の作成を試みたが，山根（2002）によると，「性別・改まり度・年齢・役割・個人差・発話量について（中略）談話の種類がフィラーに及ぼす影響が大きい」と述べられている。また，「年齢差にしても，一部のフィラーにおいては30代と40代が分かれ目となって，種類に異なりがある」（山根，2002）ため，年齢によってはどのようなフィラーが用いられるかが異なる可能性がある。また本研究では大学生を対象に調査を行うため，フィラーの使用種類については偏りのある結果になることが予想される。よって，本調査ではフィラーの種類は聞かずに，使用頻度のみを聞く質問を行うこととした。

B. フィラーを使用するタイミング

フィラーを使用するタイミングについては，合計43個の回答が得られた。そのうち，同じ種類の回答をまとめた結果，会話が生じる前の「相手に話しかける前」，相手の発話中あるいは発話後の「相手が発話している最中に言いたい事がある時」「話の内容を理解しようとしている時」，発言と発言の間に生じる「返答に困った時」「沈黙した時」「発言内容や言葉を考えたり，思い出している時」「慎重になっている時」「相手に気を遣っている時」「恥ずかしい時，恥ずかしい内容の時」「相手が理解してくれるか不安な時」「発言に自信がない時」，自分の発言に対して起こる「癖・日常的に使用する」，会話全体に当てはまる「目上の人と会話する時」「緊張する時」の14種類に分けられた。

最も回答が得られた種類は「発言内容や言葉を考えたり，思い出している時」であり，合計15個の回答が得られた。「目上の人と会話する時」は，非常に限定的な場面であるが，不安を

想起しそうな場面であると考えられた。

C. フィラーを使用する意図

フィラーを使用する意図では33個の回答が得られた。フィラーを使用するタイミングと同様に，同じ種類の回答をまとめた。その結果，「考えるため」「考えていることを相手に示すため」「発話権の保持のため」「雰囲気をやわらかくするため」「間を埋める，間をつなぐため」「自分が話を納得するため」「相づち」「自分のペースを保つため」「感情表現」「理解してもらいたい」「自分に注意を向けてもらうため」「下手（したて）に出る」「強調するため」「説得するため」「無意識に行っている」という，15種類に分けられた。その結果，最も回答が多かったものは，それぞれ8個の回答が得られた「考えていることを相手に示すため」と「間を埋める，間をつなぐため」であった。

第Ⅳ章　方　法

1. 対象者

関東地方の私立大学の大学生332名に質問紙調査を行った。

2. 実施日時

2018年7月から9月に実施した。

3. 調査内容

質問紙に用いた質問項目は以下の通りである。

A. フェイスシート

年齢，性別の記入を求めた。

B. STAI日本版（State-Trait Anxiety Inventory：状態－特性不安検査）（清水・今栄，1981）

曽我（1983）はSpielbergerを引き合いに「不安とは，恐ろしいという判断を基礎にした，恐怖の予期などの不確かな心理的要因が随伴する情緒である」とし，特性不安（trait-anxiety）と状態不安（state-anxiety）というタイプの異なる2種の不安が含まれると仮定した。特性不安（以下，特性不安についての尺度をA-Traitと呼ぶ）とは，「人格とも言うべき生来もっている不安」であり，一方，状態不安（以下，状態不安についての尺度をA-Stateと呼ぶ）とは，「有害なものとして判断したとき短時間に誘発される不安状態」である（水口・下仲・中里，1991）。STAI日本語版は，特性不安と状態不安をそれぞれ20項目の質問によって測定する。今回は，両方の下位検査を使用し，A-Stateに関してはフィラーを使用した時の状態を思い出してもらって評定することとした。

STAI日本版は1981年に作成されたこともあり，対象者となる現代の大学生とは言葉遣いのニュアンスが異なる部分があった。質問紙の内容や文の意味が変わらない程度に，予備調査によって受けた指摘を元に改変を行った。以下に変更を行った3つの箇所を挙げる。1つ目の箇所はA-Trait，A-State共に，現在はあまり使用しない言い回しであることから，選択肢2「いくぶんそうである」を「あまりそうでない」に変更した。2つ目については，A-Traitの教示文は「心の状態を表現する文章が下に記述してあります。その各文章について，ふだん，一般にどの程度の状態か，該当する番号を○で囲んでください。あまり考える必要はありませんが，現在の気持ちをもっともよく表現しているものに反応するよう心掛けてください」であるが，普段の様子を聞いているのか今の状態を聞いているのかが紛らわしいため，「心の状態を表現する文章が下に記述してあります。その各文章について，自分が普段，一般にどの程度の状態か，該当する番号を○で囲んでください。あまり考える必要はありませんが，最もあてはまるものに反応するよう心掛けてください。」に変更した。最後に，A-Stateの教示文は「心の状態を表現する文章が下に記述してあります。その各文章について，現在，今どの程度感じているか，該当する番号を○で囲んでください。あまり考える必要はありませんが，現在の気持ち

を最もよく表現しているものに反応するよう心掛けてください」であるが，フィラーを使用している時の状態を想定してもらうため，「心の状態を表現する文章が下に記述してあります。その各文章について，上記のような言葉（「うーん」「なんか」「えーと」「あー」「あのー」「うーんと」など）を使用する時を思い浮かべると，自分はどの程度の状態か，該当する番号を○で囲んでください。あまり考える必要はありませんが，最もあてはまるものに反応するよう心掛けてください」に変更した。

なお，清水・今栄（1981）ならって，A-Trait ないしA-State尺度のいずれかで1あるいは2項目に無反応あった場合，その対象者の平均点に20を乗じ，その値を切り上げて整数にまとめれば尺度の総合得点を与えることができると考え，尺度間で2つ以内の無反応があっても無効回答とせずに有効回答とした。

C. フィラーについての質問

予備調査に基づき，フィラーの使用頻度，使用のタイミング，使用意図に分けて質問を行った。フィラーを使用するタイミングと使用意図については予備調査に基づいて質問項目の作成を行った。

新たに設置した「フィラーの使用頻度」については，予備調査の「使用するフィラーの種類」において，年齢によって使用するフィラーが異なることから，大学生を対象に調査を行う本研究では結果に偏りが出ることが予想された。本研究ではフィラーを多用することが不安と関係するかどうかを検討するため，SD法を参考に10件法によるフィラーの使用頻度を聞く質問を考えた。質問は「会話の中で，自分が発言を行う前に『うーん』『なんか』『えーと』『あー』『あのー』『うーんと』などの，会話の内容には直接関係のない言葉を発言することがあると思います。これらの言葉について考えた時，1が『全く使用しない』，10が『全てに使用する』である場合，あなたの使用頻度はどの程度になりますか。該当する番号を○で囲んでください」という文章を提示した。フィラーは全ての人が使用すると考えたが，全く使用しないことを考慮し，「全く使用しない」人からも回答が得られるようにした。また，フィラーの使用頻度を聞く質問で例示されているフィラーの種類は，予備調査で回答が多かったものを使用した。

フィラーを使用するタイミングと使用意図については複数回答を可能とし，現在の大学生がどのようなタイミングで，あるいは意図を持ってフィラーを使用するのかについて広くデータが得られるようにした。質問項目については予備調査でまとめた種類に準じた。

4. 手続き

大学の講義時間内において無記名かつ個別記述式の質問紙調査を配布した。口頭および書面（質問紙の表紙）で本調査への参加は任意であること，得られたデータは本研究のみで使用され，個人が特定されることはないことを伝えた。同意を得られた場合にのみ回答を求めた。調査時間は15分程度であった。

第Ⅴ章　結　果

1. 有効回答数と分析対象者

大学生計332名を対象に質問紙調査を行った。そのうち，有効回答は254名であった（男性149名，女性105名，平均年齢19.3歳，SD 1.99歳）。

2. 尺度の記述統計量と信頼性

A. STAI日本語版

STAI日本版についてはどちらの尺度も合計得点で分析した。A-Trait尺度の結果は，平均値47.8点，中央値48点，最頻値49点，SD 8.26点，最小値26点，最大値75点であり，クロンバックのα係数は0.66であった。

A-State尺度については，平均値48.9点，中央値48点，最頻値48点，SD 8.84点，最小値23点，最大値77点であり，α係数は0.81となった。

また，A-TraitとA-Stateの分布については以

下のとおりである（図1）。

B. フィラーの使用頻度

全体の平均値は6.5であり，中央値と最頻値はともに7となった。フィラーを使用する頻度について1を選択した人は0名，2を選択した人は3名，3を選択した人は12名，4を選択した人は23名，5を選択した人は34名，6を選択した人は49名，7を選択した人は63名，8を選択した人は41名，9を選択した人は9名，10を選択した人は20名という結果となった。フィラーの使用頻度の分布を表したグラフは以下に示す（図2）。

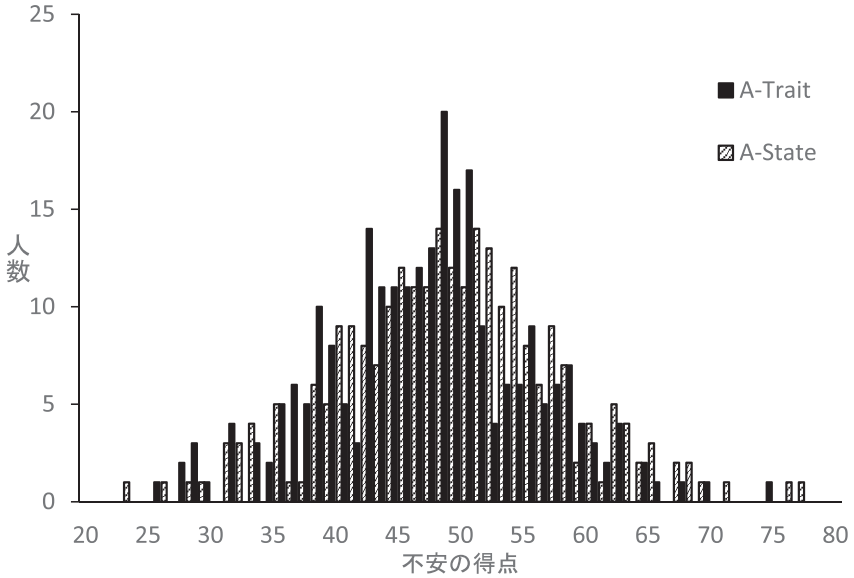

図1　STAI日本版における不安の得点

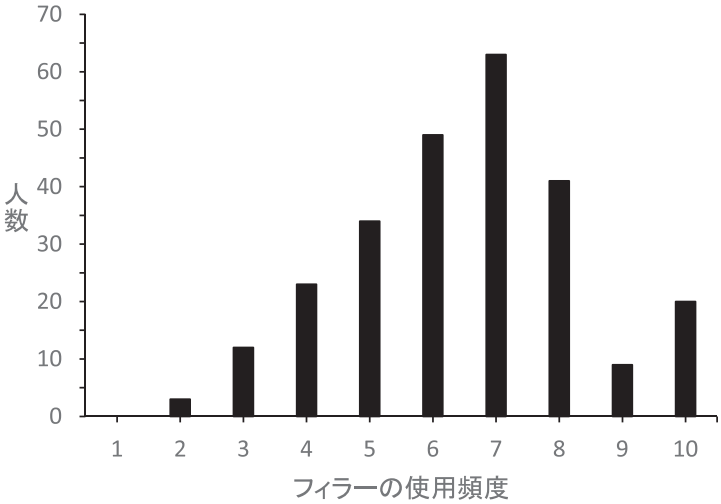

図2　フィラーの使用頻度

C. フィラーを使用するタイミング

フィラーを使用するタイミングについては，「返答に困った時」を選択した人が最も多い176名であった。次に多い順に「発言内容や言葉を考えたり，思い出している時」(161名)，「緊張する時」(125名)，「話の内容を理解しようとしている時」(112名)，「発言に自信がない時」(110名)，「相手に話しかける前」(102名)，「相手に気を遣っている時」(88名)，「恥ずかしい時，恥ずかしい内容の時」(74名)，「癖・日常的に使用する」(70名)，「相手が発話している最中に言いたい事がある時」(63名)，「沈黙した時」(60名)，「相手が理解してくれるか不安な時」(58名)，「慎重になっている時」(54名）となり，最も該当者が少なかった項目である「目上の人と会話する時」を選択した人は46名であった。

D. フィラーを使用する意図

フィラーを使用する意図についても，タイミングと同様に該当者数が多い順から列挙すると，「考えるため」(191名)，「間を埋める，間をつなぐため」(147名)，「無意識に行っている」(118名)，「相づち」(115名)，「考えていることを相手に示すため」(77名)，「自分のペースを保つため」(58名)，「雰囲気をやわらかくするため」(49名)，「理解してもらいたい」(48名)，「下手（したて）に出る」(38名)，「自分が話を納得するため」(37名)，「感情表現」(35名)，「発話権の保持のため」(31名)，「自分に注意を向けてもらうため」(19名)，「説得するため」(18名)，「強調するため」(16名）となった。

3. フィラーの使用頻度とA-TraitおよびA-Stateの関係

A. フィラーを多用する群におけるA-TraitとA-Stateの平均値の差の検定

今回の調査において，フィラーの使用頻度の平均値は6.5であり，中央値と最頻値はともに7であった。人数の偏りも考慮した上で，使用頻度が7以上の134人をフィラーを多用する群とした。このフィラーを多用する群のA-TraitとA-Stateの平均値に対応のあるt検定を行ったところ，有意差は認められなかった［$t(132) = -0.57$, n.s.］。

B. フィラーをあまり使用しない群におけるA-TraitとA-Stateの平均値の差の検定

同様に，使用頻度が6以下の122人をフィラーをあまり使用しない群として，この群におけるA-TraitとA-Stateの平均値の差を見るために対応のあるt検定を行ったところ，有意差は見られなかった［$t(120) = -1.94$, n.s.］。

C. A-TraitおよびA-Stateにおける，フィラーをあまり使用しない群とフィラーを多用する群の平均値の差の検定

フィラーを多用する群とフィラーをあまり使用しない群で，STAIの2つの下位尺度を用いてt検定を行った。A-Traitについては，フィラーを多用する群の平均値が有意に大きかったが［$t(252) = -2.27$, $p<.05$］，A-Stateでは有意差は見られなかった［$t(252) = -1.06$, n.s.］。

4. フィラーを使用するタイミングについて

フィラーを使用するタイミングにおける項目がどのように類似しているかを見るためにWard法を用いてクラスター分析を行ったところ，以下のような結果となった（**図3**）。クラスターを距離6で切断すると，全部で4つのクラスターが得られ，第1クラスターは目上の人と会話したり恥ずかしい時など「居心地の悪い時」，第2クラスターは主に話しかける前に使うということで「神経質になる時」，第3クラスターは話の内容を理解したり思い出そうとしたりするなど「会話に集中する時」，第4クラスターは発言に自信がなかったり困ったりするなど「顔色を伺う時」と解釈した。

5. フィラーを使用する意図について

フィラーを使用する意図についてもWard法

でクラスター分析を行ったところ，以下のような結果となった（図4）。タイミングの分析よりもクラスター間の距離が短かったため，2つのクラスターを抽出したところ，第1クラスターは自分に注意を向けたり，強調したりする「会話を主導」するため，第2クラスターは間

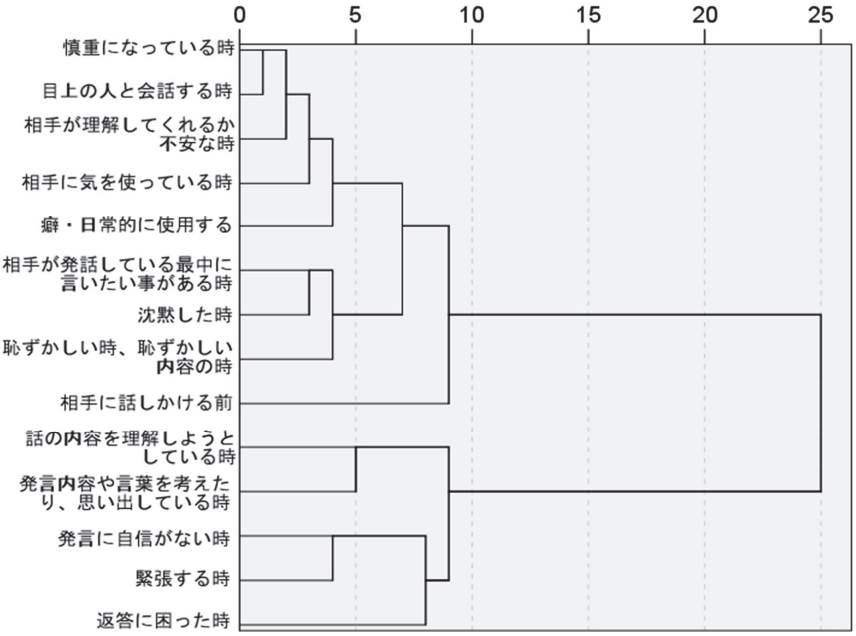

図3　フィラーを使用するタイミングのクラスター分析

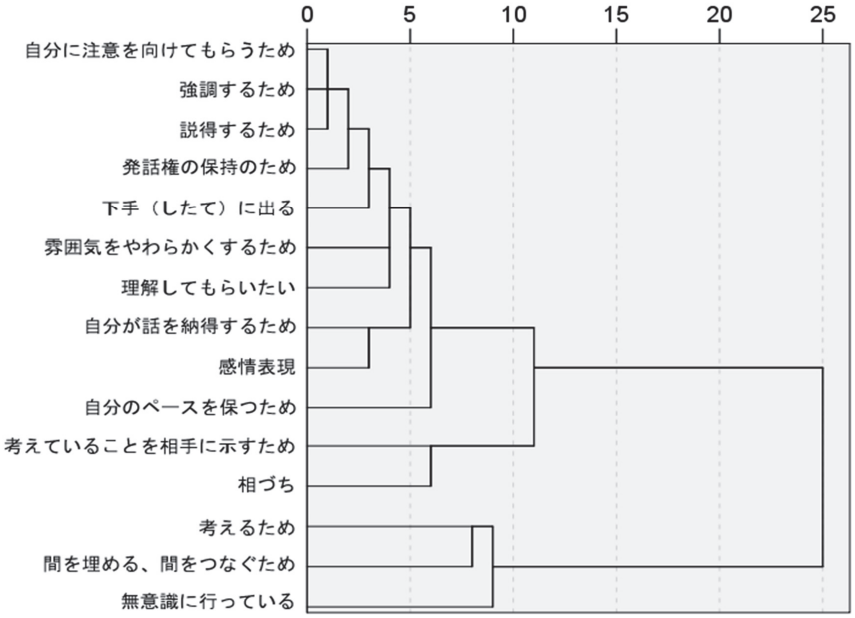

図4　フィラーを使用する意図におけるクラスター分析

を埋めたり，無意識に行ったりする「相互的な会話」のためであると解釈した。

6. 性差について

A. 性別の記述統計量

フィラーの使用頻度は男性が6.3（SD = 1.91），女性が6.7（SD = 1.70）となった。男性において，最小値は2（3名），最高値は10（10名）で，最頻値は7（34名）であった。一方女性は，最小値が3（2名），最高値が10（10名）であり，最頻値が7（29名）であった。女性と男性のフィラーの使用頻度における分布を**図5**に示した。

また，A-Traitの平均は男性が47.2点（SD = 9.05），女性48.7点（SD = 6.91）であった。最小値は男性が26点，女性が32点で，最大値は男性が75点，女性が68点であった。A-Stateの平均は男性が49.0点（SD = 8.98），女性が48.6点（SD = 8.68）であり，最小値は男性が26点，女性が23点，最大値は男性が77点，女性が71点となった。

B. 男女それぞれの結果に対する平均値の差の検定

（1）A-TraitとA-Stateの平均値の差の検定

男性はA-TraitよりもA-Stateの平均値が有意に大きかった［$t(148) = -2.35, p<.05$］が，一方，女性ではA-TraitとA-Stateにおける差は見られなかった［$t(104) = 0.16$, n.s.］。

（2）フィラーをあまり使わない群と多用する群のA-Traitの平均値の差の検定

上述の例にならって，男性と女性それぞれでフィラーをあまり使用しない群とフィラーを多用する群に分けてt検定を行った。男性ではフィラーを多用する群の平均値が有意に大きかった［$t(147) = -2.59, p<.05$］のに対して，女性においては有意差は見られなかった［$t(103) = -0.13$, n.s.］。

（3）フィラーをあまり使わない群と多用する群のA-Stateの平均値の差の検定

A-Traitと同様に，A-Stateにおいても男性と女性それぞれでフィラーをあまり使用しない群とフィラーを多用する群に分けてt検定を行った。男性ではフィラーを多用する群の平均値が有意に大きかったが［$t(147) = -1.99, p<.05$］，女性では有意差は見られなかった［$t(103) = 0.42$, n.s.］。

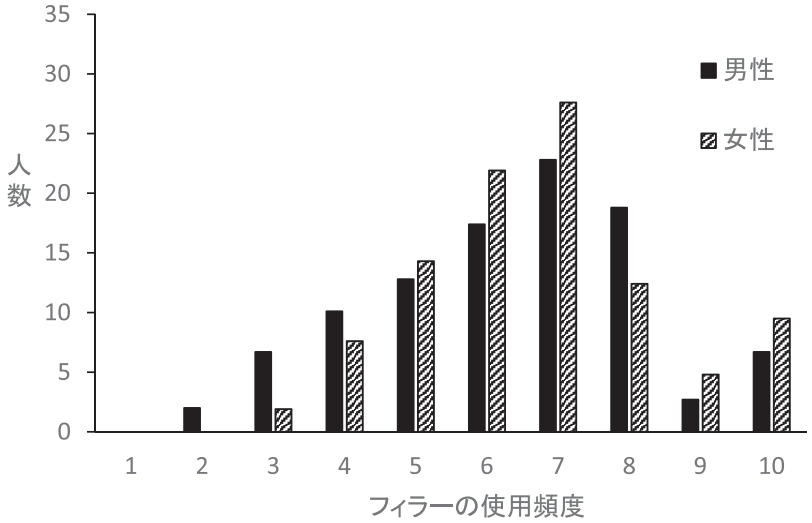

図5　フィラーの使用頻度の男女比較

C. 男女間での差

質問紙の尺度ごとに男女の差についてt検定を行ってみたが，A-Traitの平均値［t(252) = −1.57, n.s.］においても，A-Stateの平均値［t(252) = 0.36, n.s.］においても，性差は見られなかった。また，フィラーの使用頻度においても同様に，性差は見られなかった［t(252) = −1.52, n.s.］。

第Ⅵ章　考　察

1. フィラーの使用頻度について

本研究の質問紙では，フィラーの頻度について，1が「フィラーを全く使用しない」，10が「全てにフィラーを使用する」とした時，1から10のどこに該当するかを評定してもらった。本研究では1を選択した人はおらず，頻度の多少はあっても全く使用しないということはないことが示唆された。これに対して，10の「全てに使用する」という回答については，会話ごとに毎回使うのか，センテンスごとに使うのかが曖昧であった。そのため，回答者に依存した質問となってしまった点は否めない。しかしながら，フィラーの使用頻度はほぼ正規分布であることが分かった。フィラーを使う頻度が多いと意識している人がそうでない人よりも多いといえる。今回の調査結果の特徴は，中央値と最頻値がともに7であったこと，10を選択した人は20名いたのに対して9を選択した人はその半分以下の9名であったことである。

中央値，最頻値がともに7であったことについて，どのように考えられるだろうか。大学の講義における文系と理系のフィラーの使い方の違いについて研究を行った野村（1996）によると，文系は理系の倍以上のフィラーを使用し，文系は「話し手自身の話しやすさのための機能を果たすフィラー」が多く，理系では「聞き手にとって意味のある」フィラーが多いという。今回の調査はほとんどの対象者が文系の大学生である。野村（1996）の研究はあくまでも「どのようなフィラーの使い方によって講義が進められているか」に焦点を当てたものである。本研究にそのまま当てはめて考えることは難しいとはいえ，今回の調査でフィラーの使用頻度が全体的に多かったのは，調査対象者の多くが文系の学生だったためである可能性も考えられる。

実際にどの程度使用しているかは別として，本研究において本人の自覚ではフィラーをやや多く使用すると感じている人が多いことが認められた。本研究では「フィラーをどのくらい使用していると自覚しているか」という側面しか明らかにできなかったが，今後の研究では，フィラーを使用することについて考えた時に，どのような印象を受けるのか，実際に使用する頻度と自覚している頻度とはどのような差があるのかなどについても調べる価値があると考える。

2. フィラーを使用するタイミングについて

フィラーを使用するタイミングで過半数の回答が得られた「返答に困った時」や「発言の内容や言葉を考えたり，思い出している時」は，言語学におけるフィラー研究で既に概念化されている要素である。

フィラーを使用するタイミングにおいて，クラスター分析では「居心地の悪い時」「因子神経質になる時」「会話に集中する時」「顔色を伺う時」の4つのクラスターが得られた。本研究ではフィラーを使用するタイミングにおいて，言語学的なフィラーの研究とは違ったフィラー使用に至る背景的要素を垣間見ることができた。「会話に集中する時」以外のクラスターは「リラックスした会話が困難な場合」に出現すると考えられる。フィラーを使用するタイミングには会話を発展させるための言語指標的要素と不安や緊張などの情緒的表出的な要素があるといえよう。

3. フィラーを使用する意図について

フィラーを使用する意図において過半数を超える回答が得られたものは「考えるため」「間を埋める，間をつなぐため」であり，フィラーを使用するタイミングで過半数を超える回答を

得られた項目と同様に，フィラーの言語的研究で既に概念化されている項目であった。

フィラーを使用する意図におけるクラスター分析では，「自分に注意を向けてもらうため」「強調するため」「説得するため」が最も近接しており，自分の話を聞いてもらいたい気持ちやわかってほしい気持ちからフィラーを使用する「会話を主導」するためのクラスターがまず第一に考えられる。一方で先行研究に多く出現した「考えていることを相手に示すため」という意図は同じクラスター内にまとめられるものの距離は比較的遠くなった。

フィラーを使用する意図における2つ目のクラスターである「相互的な会話」の存在から，フィラーには演説的な話をする際に使用されるものと，対話的な会話をする際に使用されるものとの，2種類に分類できることが示唆された。これはフィラーの先行研究でも述べた，Maynardが指摘した「言語表出に関わるフィラーと，対人関係のために用いられるフィラーの2種類」（福原，2009）というフィラーの分類に似ている。

今回の調査からは，フィラーは考えていることを伝えるためのものと言うよりも自分の話したいことを話すため，つまり会話の主導権を得る要素の方が強いと考えられる。

4. STAI日本語版について

今回の調査においてA-TraitもA-Stateもほぼ正規分布となった。中央値は両尺度とも48点であり，不安の高さは，ごくわずかであるが少ない傾向にあると言える。それぞれの分布の特徴として，A-Traitは得点が43 ～ 50点の人数が非常に多く，A-Stateはまんべんなく分布していた。両尺度において男女での差は少なかった。清水・今栄（1981）がSTAI日本語版を作成した当時は，学年末試験の直前と平常授業直後で調査を行っており，特性不安を表すA-Traitの結果は平常時と試験直前でそれぞれ45.36点と45.35点であった。水口ら（1991）は，疫学的な高不安者の判定基準として「男性では状態不安は42点以上，特性不安は44点以上，女性では状態不安は42点以上，特性不安は45点以上が高不安と判断する」と述べている。正常成人の平均得点が「特性不安は38.8 ± 9.68」，「状態不安は36.6 ± 8.98」（水口ら，1991）であることを考えても，今回の結果は，A-Traitが47.8点，A-Stateが48.9点と，先行研究の結果よりも不安が高い結果となった。このことについてはいくつか要因が考えられる。1つ目は清水・今栄（1981）の研究から40年弱を経てストレス社会と呼ばれるようになるほどストレスが身近なものになった。そのために不安が生じやすくなった可能性が挙げられる。2つ目は，フィラーについての質問を行うと説明した直後にA-Traitを回答したため，影響が生じた可能性も考えられる。

5. 仮説の検証

フィラーを多用する群におけるA-TraitとA-Stateのt検定には差が見られなかったため，「仮説1：フィラーには不安を一時的に下げる効果があり，フィラーを多用する人の方がフィラーを使用すると一時的に不安が下がる」は立証されなかった。またフィラーをあまり使用しない群におけるA-TraitとA-Stateの平均値に差が見られなかったため，「仮説2：フィラーには一時的に不安を下げる効果があり，フィラーをあまり使用しない人の方が一回の使用価値が高まるため，フィラーを使用している時には一時的に不安が下がりやすい」は立証されなかった。

一方，「仮説3：フィラーには不安を下げる効果があり，フィラーを使えば使うほど特性的な不安も一時的な不安も下がっていく」に基づいて検証を行ったところ，A-Stateにおいてはフィラーを多用する群とあまり使用しない群で差が見られなかったが，A-Traitでは有意差が見られた。フィラーを使用することによって不安が下がるとは決して言えないが，フィラーを使用することと不安の高さには何らかの関係があると考えられる。先行研究において，Ragsdale（1976）は，「すべてではないが，い

くつかの言いよどみ現象は不安と明確に関係することを立証している研究は，現在かなり多く見られる」が，しかしながら，「『えーと』現象（the Ah Ratio）が不安と無関係であることはかなり広範に同意されている」（ここでの“『えーと』現象”とは，フィラーを示す）と述べている。とはいえ，フィラーの使用頻度を切り口に不安との関係性を考えると，特性的な不安において関係がある。「フィラーを使用することで不安が軽減される」とまでは述べられないが，「不安が高いからフィラーを使用する」とは言うことができる。

6. 性差について

本研究において男女間のフィラー使用頻度の平均値に差があるとはいえなかったが，データの分布には差が見られた。男性よりも女性の方がフィラーをよく使用すると考えている人が多いのに対し，男性の方がフィラーの使用頻度の範囲（最大値と最小値の差）が大きかった。また不安尺度であるSTAIにおいても，女性よりも男性の方が不安得点の範囲（最大値と最小値の差）が大きくなった。

平均の差は男性にのみ見られ，特性的な不安を示す値よりもフィラーを使用する状態の不安の方が高くなり，また，どちらの不安においてもフィラーを多用する人の方が不安が高まるという結果になった。このことから，本研究の大きな仮説である「フィラーの使用頻度によって不安の程度が高まる」ことへの可能性が見出せた。一方で，女性ではまったくこのような結果は見られなかった。女性において差が見られなかったことについては2つの可能性が考えられる。1つは，女性は不安の媒体としてフィラーを使用せず，他の情動が背景にあるということである。2つ目は，女性はフィラーの使用頻度やA-Trait，A-Stateいずれにおいても男性よりも分散が小さかったことから考えて，本研究では特に女性に中心化傾向が起こってしまったという可能性である。

フィラーを使用するタイミングについて，男女間の差が大きかった9項目のうち，女性の方が該当者の割合が多かったのは「発言内容や言葉を考えたり，思い出している時」「相手が発話している最中に言いたいことがある時」「話の内容を理解しようとしている時」「癖・日常的に使用する」「相手に気を遣っている時」「発言に自信がない時」「恥ずかしい時，恥ずかしい内容の時」の7項目であった。最も差があった項目は「発言内容や言葉を考えたり，思い出している時」において女性が男性よりも非常に高かった。この項目では，当てはまると答えた男性は5割強ほどであったのに対し，女性は7割以上が当てはまると答えた。これは，松原（1996）による「適当な表現が見つかるまで，或いは発語内容をまとめたりする時間を稼ぐ機能」や，山根（2002）のフィラーの果たす役割5点における「③適切な応答を考えつくまでの時間稼ぎ」に当てはまり，女性は男性よりもより言語学的な解釈に近いフィラーの使い方をすることが考えられる。男性よりも女性の方が当てはまると答えた割合が多かった項目は他にもいくつかあり，「相手が発話している最中に言いたい事がある時」「話の内容を理解しようとしている時」「癖・日常的に使用する」「相手に気を遣っている時」「発言に自信がない時」「恥ずかしい時，恥ずかしい内容の時」が挙げられる。このことから男性よりも女性の方がフィラーの使い方が多義であること，あるいは使用する場面が多様であることが予想される。また，「癖・日常的に使用する」以外は発言内容に関する項目であり，女性は会話の内容や自分の発言を男性よりも気にしている傾向にあると言える。さらに，女性は発言内容が気になっている時にフィラーが現れやすいと考えられる。

一方で男性の方が該当者の割合が多かった項目は，「沈黙した時」「慎重になっている時」であった。男性はこのような場面でフィラーが女性よりも多く使用される可能性が考えられる。「沈黙した時」や「慎重になっている時」は緊張する場面が想起されるが，「緊張する時」には男女での差は少なく，5割の人が緊張した時

にはフィラーを使用すると答えている。男性においては「沈黙した時」「慎重になっている時」の倍の該当者であった。「緊張する時」では男女ともにフィラーを使用することはわかったが，「沈黙した時」「慎重になっている時」は男女での感じ方が異なると考えられ，沈黙する場面や慎重になるような場面にフィラーを使用するということから，男性は場の雰囲気を気にしてフィラーを用いていると考える。

フィラーの使用意図では該当率の差が少なく，ほぼ同じ割合の項目が多かった。その中でも差が大きかったものは「発話権の保持のため」「間を埋める，間をつなぐため」「無意識に行っている」「強調するため」であり，男性の方が該当者の割合が多かった項目は「発話権の保持のため」「強調するため」であった。これらの項目は該当者数がそもそも少ない項目ではあるが，男性は女性よりも自分の主張のためにフィラーを使用すると考えられる。一方で女性の方が多かった項目は「間を埋める，間をつなぐため」「無意識に行っている」であった。気づかないうちにフィラーを使用しているという，会話におけるフィラーのあり方がそのまま本調査の結果として表れているとも考えられる。

フィラーを使用する意図については，男女間での該当者はほとんどが同じ程度であった。その中でも該当者の割合の差が大きかったものは「発話権の保持のため」「間を埋める，間をつなぐため」「無意識に行っている」「強調するため」であった。「発話権の保持のため」と「強調するため」は男女ともに該当者自体の割合は少なかったが，どちらも男性の方が女性よりも多かった。このことから，男性は女性よりも自身の存在をアピールするような目的でフィラーを使用することが示唆される。一方で女性の方が該当者の割合が多かった項目は「間を埋める，間をつなぐため」と「無意識に行っている」であった。これらは男女ともに該当者が比較的多い項目で，女性に関してはどちらも半数を超えた回答を得られた。女性の方が「間を埋める，間をつなぐため」にフィラーを使用していることから，どのような感情が込められているにせよ，女性は男性よりも沈黙を好まないことが考えられる。また，「無意識に行っている」のが女性は過半数を超え，男性も4割強であったことからフィラーについて意識的に考えることの難しさを物語っている。また，フィラーを使用する意図における女性の該当者数が多かったものは，「考えるため」に次いで「間を埋める，間をつなぐため」「無意識に行っている」が多い。女性は男性よりもフィラーを使用することに対して無意識であり，フィラーの語源である“間を埋めるもの”そのものとして使用していることが示唆される。

7. 総合考察

先行研究（Ragsdale，1976）ではフィラーと不安は無関係であると述べているが，今回の調査においてはフィラーを使用する頻度が高いほど特性的な不安が高いということ，男性においてフィラーを使用する頻度が高い人ほど特性的な不安もフィラーを使用する時の不安も高いという結果から，フィラーと不安が一概に無関係であるとは言い難い。先行研究と今回の調査結果が異なった原因として，調査の方法が異なるということも考えられるが，不安とフィラー，あるいはフィラーを含んだ大きな概念としての言いよどみとの関連を見る研究は数十年前のものが多く，フィラーの使われ方や意味が以前とは変化している可能性もあげられる。近年では，インターネットがあることが当たり前になり，国際化が以前よりも著しく進み情報化社会化された。その影響で新しい言語が急速に生み出されているように感じられる。福原（2009）によって「なんか」が若者言葉であると述べられていたが，福原の研究から10年ほどたった現在では，日常的に耳にする言葉として違和感がない。次々と新しい言葉が生み出される中で，「フィラーが不安と関係がある」ことについて先行研究と異なっていても，ストレス社会化など，他の要素も考えられる。これらのことから，フィラーと不安との関係については今一

度考え直してみる価値が十分にあると考える。

しかしながら，本研究には課題が多く見受けられる。質問紙にて調査を行ったため，調査協力者がどのようなフィラーの使用場面を思い浮かべて回答したかどうか，どのような不安を想起したかどうかも異なる。フィラーの使用意図において「無意識に行っている」に該当した人数は118名と過半数には到達しなかったものの，多くの人がフィラーは普段意識して使用していないことが分かる。そのため，意識している部分のみが扱われる質問紙調査はあまり向いていなかった可能性は大いにある。今回の研究では“意識して考える限り”フィラーは不安と関係がありそうであると言える。

また，本研究最大の課題は，フィラーを使用した後にはどういった状態になるかを調査協力者に質問を行っていないという点であると考える。フィラーが不安と関係すると分かっても，フィラーを使用した後の状態を質問しなければフィラーがどのような効果を発揮するのかが分からない。今回は検定結果の有意差が見られなかったために仮説の立証はなされなかったが，フィラーを使用した後にどうなるのかを把握していない限り，たとえ全ての結果で有意差が見られても一概にフィラーの使用効果を述べることは困難である。

このように検討の余地がある今回の研究であるが，フィラーを使用する頻度が高いほど特性的な不安が高いということや，男性においてフィラーの使用頻度とそれぞれの不安との関係が見られたことは，フィラー研究における大きな成果であると考える。カウンセリングや心理療法などの臨床場面において，患者やクライアントがフィラーを多く使用する場合は，特性的な不安が高い可能性があると考えられる。今回の結果からはあくまで可能性としてのみの言及であるが，臨床場面において他の手がかりが見出せない場合には，一つの見方として参考にすることもできるだろう。その人がどのような人なのかを知るための一つの見方として確立するためにはフィラーと不安の関係について今後も検討していく必要があり，また検討を行う価値があると考える。

引用文献

Freud, S. (1917). *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. 井村恒郎・馬場謙一（訳）（1994）．精神分析入門（上）．日本文教社.

福原裕一（2009）．会話に見られる「なんか」の機能拡張：フェイス・ワークの観点から．国際文化研究（東北大学），15．181-195.

石川　創（2010）．あいづちとの比較によるフィラーの機能分析．早稲田日本語研究（早稲田大学日本語学会），19，61-72.

Jung. C. G. (1905). *Über das Verhalten der Reaktionzeit beim Assoziationsexperimente. Journal für Psychologie und Neurologie*, Ⅳ, 1-36. 高尾浩幸（訳）（1993）．診断学的連想研究．人文書院.

海保博之・原田悦子（1993）．プロトコル分析入門：発話データから何を読むか．光明社.

河合隼雄（1967）．ユング心理学入門．培風館.

小出慶一（2006）．フィラー「このー」「そのー」「あのー」について：その由来，機能，相互関係．埼玉大学紀要，42（2），15-27.

小出慶一（2009）．現代日本語の意味・用法の広がりに関する記述的研究：多機能化，フィラー，フィラー化．埼玉大学紀要，6，1-37.

小出慶一（2017）．「もう」はどのようにフィラーになったか：フィラー化の経路とフィラーの機能．さいたま言語研究（埼玉大学），1，1-11.

小西友七・南出康世（2001）．ジーニアス英和大辞典．大修館書店.

松浦和美（1996）．日本語の談話におけるfillerに関する研究．教育学研究紀要（中国四国教育学会），42（2），522-527.

水口公信・下仲順子・中里克治（1991）．日本版STAI：状態・特性不安検査（使用手引）．三京房.

中村香代子（2007）．日本語の感謝表現と共に用いられるフィラーについて：自由記述式談話完成テストの回答分析から．言語学教育研究論叢（大東文化大学），24，149-168.

成田善弘（2004）．第6部 精神分析．氏原　寛・亀

口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕（2004）．心理臨床大事典　改訂版．培風館．
野村美穂子（1996）．大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語：「フィラー」に注目して．教育研究所紀要（文教大学），5，91–99.
Ragsdale, J. D. (1976). Relationships between hesitation phenomena anxiety, and self-control in a normal communication situation. *Language & Speech*, 19(3), 257–265.
定延利之（2010）．会話においてフィラーを発するということ．音声研究，14（3），27–39.
定延利之・田窪行則（1995）．談話における心的操作モニター機構：心的操作標識「ええと」と「あの（ー）」．言語研究，108，74–93.
清水秀美・今栄国晴（1981）．STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版（大学生用）の作成．教育心理学研究，29（4），62–67.
曽我祥子（1983）．日本版STAIC標準化の研究．心理学研究，54（4），215–221.
高木智世・森田　笑（2015）．「ええと」によって開始される応答．社会言語科学，18（1），93–110.
田窪行則（1995）．音声言語の言語学的モデルをめざして：音声対話管理標識を中心に．情報処理，36（11），1020–1026
田窪行則・金水　敏（1997）．応答詞・感動詞の談話的機能．音声文法研究会（編）（1997）．文法と音声．くろしお出版．
田中　敏（1981）．日本語発話における言いよどみ現象の分類と特徴づけ．心理学研究，52（4），213–218.
富坂容子（2002）．断定回避のディスコースマーカー．言語と文化（甲南大学），6（1），103–115.
内田らら（2001）．会話に見られる「なんか」と文法化：「前置き表現」の「なんか」は単なる口ぐせか？　東京工芸大学紀要，24（2），1–9.
上田有希子（2005）．話しことばの位相：会話におけるフィラーの研究．日本文學（東京女子大学），101，163–183.
山根智恵（2002）．日本語の談話におけるフィラー．くろしお出版．

Abstract

On the Relationship Between Using Fillers and the Strength of Anxiety

Ena Okada

The present study was intended to investigate the relationship between using "fillers," the interjectional words such as "eh" and "mah" in Japanese, and the strength of anxiety. Considering the lack of empirical data in previous studies, it deserved to collect data of using fillers. After preliminary survey with graduate students, a survey with new questionnaire was conducted with 254 undergraduate students. The questionnaire consisted of a Japanese version of 40-item State-Trait Anxiety Inventory (STAI) and three questions on the frequency, timing, and intention of using fillers. Although no overall difference between the frequent and the less frequent users of fillers in terms of STAI scores was obtained, there was a significant difference of STAI scores between the frequent and the less frequent users in male students, which suggested the relationship between using fillers and the strength of anxiety.